

第1章 「修学ポートフォリオ」

1. 1 「修学ポートフォリオ」構築に至る背景とその目的

平成7年度の第1次教育改革までは、米国大学の初年次教育制度を参考にした「フレッシュマンセミナー」（前・後期の通年開講、クラス担任制）と学習スキルを取り込んだ「図書情報技術」とを開講していた。改革において年間3学期制（1学年3期、通算12期）のセメスター制を採用するにあたり、これら2科目を「フレッシュマンセミナー」（1期、1単位）と「修学基礎能力演習」（1期、2単位）とに再編した。前者は入学直後のオリエンテーションとしての性格が強く、大学環境に慣れるための修学姿勢を身に付け、修学計画を立案することを目的としており、その内容の多くは現行の「修学基礎Ⅰ」に継承している。後者は学生が任意のテーマ（工学分野に限定されない）にもとづいて、論理的なリサーチペーパーの作成方法とプレゼンテーション手法とを身に付けるものであった。

しかし平成13、14年頃から、多様な修学履歴・入試形態から入学する1年生の修学指導面における問題が目立つようになった。1期で身に付けたはずの修学・生活姿勢が、夏期休暇明けの2期になると失われがちになり、学生と修学アドバイザー（クラス担任）との定期的な接触機会の喪失により修学指導が難しくなるなど、所期の目的を達成することが困難になってきた。それまで教育改革による教育システムの改善と運営は着実に進んでいるとの認識であったため、そのような学生が存在していても「レアケース」として省みられず、「大学生だから大人」という認識が支配的であった。すなわち平成7年に教育改革を開始した本学においても、学生の変化にさほどの注意を払っていなかったのである。しかし大学教育界における2006年問題（ゆとり教育1期生の大学入学）・2007年問題（全入時代）を目前に控え、学生の質的变化が歴然とするようになり、学生の修学と生活の両面に対する指導は、本学において急務の課題として位置付けられることになったのである。

そこで建学綱領である「人間形成」を柱とする教育プログラムを開発し、通年授業で実践することになった。新入学生が修学・生活の目標と技術者としての心構えを自覚できるようにするためには、また満足度や定着率を向上させるためにも、修学アドバイザーが学生とのコミュニケーションを通し、生の声に耳を傾けながら、通年で指導すべきであると判断したのである。本学では穴水湾自然学苑における1～3年次必修科目「人間と自然ⅠⅡⅢ」において「人間形成」教育を行ってはいるものの、それは2泊3日という極めて短期間であるため、1年生の段階で修学・生活の両面から通年で科目として指導する方針に大きく転換したのである。

まず本学の建学綱領筆頭の「人間形成」を教育目標とする科目にどこまで落としこめるか、という課題に対して、「まず学生諸君に自分を管理し、自分を見つめ直してもらい、その結果、何かに気が付いてくれたらいい」という発想が出された。次に、それを「自分でやりなさい」と言っても学生はなかなか実行しないので、教員が毎回フィードバックによって学生との相互確認を行う必要性が確認された。最終的にこれらを1年間通じて行い、記録として保管するためのツールとして「修学ポートフォリオ」が考案されたのである。そしてこれを実施する科目が、平成16年度より開講した大学教育適応支援促進科目とでもいふべき「修学基礎ⅠⅡⅢ」（1

～3期、各1単位)である。

1. 2 大学教育適応支援促進科目「修学基礎ⅠⅡⅢ」と「修学ポートフォリオ」

「修学基礎ⅠⅡⅢ」の教育手段としての特異性は、「修学ポートフォリオ(Web)」を活用した「1週間の行動履歴」、「各学期の達成度自己評価」、および「各学年の達成度評価ポートフォリオレポート」の作成にある。

本科目の学習目標は、

- ①本学の学生として求められる、学習や生活に取り組む態度や方法を体験する。
- ②自己実現を目指した自主的な学習計画を設計し、実行する姿勢を身に付ける。
- ③活動と行動の基準や日本語表現能力を身に付けたうえで、それらを実践する。

の3項目である。「人間力」を身に付ける教育、すなわち「社会に適合できる能力」を身に付ける教育を一通り体験する「体験型科目」といえよう。

次に科目の内容は、第1に自学自習の姿勢および生活スタイルを確立し、あわせて自己管理能力を高めるために、「修学ポートフォリオ」(「1週間の行動履歴」「各学期の達成度自己評価」)を作成する。

第2に学長をはじめとする各種講話、科目担当教員による講義・演習(図書館利用法、グループ討議、プレゼンテーション)、日本語表現(レポート作成方法、プレゼンテーション技法、小論文コンテスト、ライティングセンターによるレポート添削)など、実験・実技系を除いた各種授業スタイルを一通り体験し、その基礎力を養う。

第3に課外活動によってチームワーク・コラボレーション能力を育成する。課外活動には、キャンパスラリー、LC(図書館)ツアー、バーベキューパーティー企画、研究室訪問、グループ発表の準備活動などがある。これら3分野を通して量的な日本語表現方法(レポート作成)を体験する。

そして第4に「修学ポートフォリオ」にもとづく個人面談の実施である(入学直後と年度末は全員、学期中の指定学生および希望学生、学期開始時の指定学生)。

このように本科目は特定のスタディスキルを盛り込んではいないものの、むしろスチューデントスキルを身に付けるための修学支援としての性格が強い。すなわち学生にとっては主体性をもった人物に育つための準備作業であり、自己の夢や目的にむけて自らキャンパスライフの設計ができる能力(目的指向型学習スタイル・自己管理能力)を養うことになる。また修学アドバイザーは1年間を通した学生指導(修学と生活)に力点を置き、学生の「自立と自律」を促しつつ、修学意欲を向上させることが求められる。そのため欠席が目立つ学生や生活上問題が見られる学生には繰り返し指導を行い、提出物には十分眼を通し可能な限り添削を施し、コメントを付記した上で、すべて返却することになっている。

1. 3 「修学ポートフォリオ」の概要
 (1) 「1週間の行動履歴」

1週間の行動履歴								
クラス名: 14期-3 氏名: 江尻 大輝								
月日	曜日	欠席・遅刻科目・理由	予習・復習・課題 (所要時間(分))	部活動・アルバイト・アルバイト などの内容・所要時間	食事			毎週の運動時間
					朝	昼	夜	
1/7	日		英語+120分数学+120分		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/8	月		数学+300分英語+30分		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/9	火		英語+30分		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/10	水		英語+60分		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/11	木			部活+17:00~21:00	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/12	金				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間
1/13	土		英語+120分		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	6時間

【この1週間の中で努力した点、反省すべき点とその対策、日常生活に気が付いた点など】

※この欄は授業以外でどのような自学自習、例えば予習、復習、課題、資格の勉強などその学習内容と時間数を入力する。3つ目の欄は課外活動、例えば利用した学内教育施設、クラブ活動、プロジェクト活動、アルバイトなどの内容と時間数を入力する。

【教員のコメント欄】

戻る 印刷する

【図1-1】修学ポートフォリオ「1週間の行動履歴」

①左端の欄に欠席、遅刻、その理由等の情報を入力する。例えば、月曜日1時間目に英語の授業を遅刻、火曜日1時間目は数学の授業を欠席などの記載があると、修学アドバイザーはなぜ1時間目を欠席するのだろうか、単純に朝起きられないのかなど疑問を抱き、学生本人に確認をとることになる。すると、何人かの学生はアルバイトしていた、中には朝の3時までコンビニでアルバイトしていたという事例もあり、指導を行うことができる。空欄であれば、すべて出席しているということになる。

次の欄は授業以外でどのような自学自習、例えば予習、復習、課題、資格の勉強などその学習内容と時間数を入力する。3つ目の欄は課外活動、例えば利用した学内教育施設、クラブ活動、プロジェクト活動、アルバイトなどの内容と時間数を入力する。

次の小さな欄は、朝食、昼食、夕食の摂取の有無、次が睡眠時間、最後は運動時間、但し積極的な運動時間で体育の授業や通学時間は含めない。この部分は20年度から生涯スポーツ担当教員から「健康管理」の要件を含めて欲しいとの要望があり採用した。

そしてこの1週間でもよかったこと、困ったこと、反省したこと、気がついたことを何でもいから200文字程度でまとめる。これを学生はプリントアウトして「修学基礎」担当教員（修学アドバイザー）に提出し（入力できない学生のために紙媒体を用意）、教員はコメントを記入して翌週返却する。一番下の「教員のコメント欄」には直接教員が入力できるが、学生が入力することになっている。教員がコメントを直接入力しない理由は、画面だけの指導になると1年次生にとって大切なフェイス・トゥ・フェイスがなくなること、および教員のコメントを確実に確認させる意味で学生が入力する方がよい、との判断からである。

これを1年間で30回繰り返すわけだが、この往復作業によって学生のことがかなりわかってくる。学生にはいろんなタイプがいて、教員の研究室に何の抵抗もなく訪ね質問できる学生もいれば、訪ねることができない学生もいる。また相談があるときに何らかのサインを入力する学生もいる。教員は必ずコメントを付けて返却するので、特に気の弱い学生は「先生は私のことを見てくれている」と、マイティーチャーターの存在に気が付くことになる。それで話し合いができるようになり、不安が解消し助かったという学生の報告も受けている。大変な労力を費やす作業で、ここまで必要かと思われるほどであるが、このようなことを1年生に対して毎週行っている。

実例として、環境・建築学部建築学科のBさんと工学部ロボティクス学科Dさんの「1週間の行動履歴」を紹介しておく。

1週間の行動履歴				
工学部 ロボティクス学科 Dさん				
※R・・・レポート、P・・・プリント				
月/日	曜日	欠席・遅刻科目・理由	予習・復習・課題 ・所要時間(分)	部活動・利用施設・アルバイト などの内容・時間帯
9/17	日	特になし	特になし	特になし
9/18	月	①取り組んだ学習内容と時間をすべて記入することで、学習の科目別のバランスを確認した。	工学基礎化学・課題・60分 コンピュータ演習・課題・120分	夢考房17:00～21:00 PLATZ21:40～24:00 夢考房16:00～18:00 PLATZ21:00～24:00 夢考房17:00～21:00 PLATZ22:00～24:00 夢考房18:00～21:00 PLATZ22:00～24:00 PLATZ20:30～25:00
9/19	火		技術者入門・復習・180分	
9/20	水		技術者入門・復習・180分 工学基礎化学・R・30分	
9/21	木		技術者入門・復習・120分 英語Ⅲ・課題・60分	
9/22	金		工学設計Ⅰ・課題・60分 数理工統合120分	
9/23	土		工学設計Ⅰ・課題・240分 機械の原理・R・270分	
【この1週間で特に努力した点、反省すべき点とその対策、日常生活において困った点など】				
週半ばまでは技術者入門の試験対策、週末は機械の原理の課題レポートに取り組んでいたため、飛ぶように時間が過ぎた。反省すべき点は、課題に時間をかけすぎ他の教科の学習ができなかったことである。折角勉強会に参加しているのだから、学習の場として最大限活用できるよう時間の配分を考えておきたい。(141文字)				
【教員からのコメント】				
戻る	②100文字作文を利用して一週間の行動を分析・評価し、次週以降の生活に反省点を活かす努力をした。		①“夢考房”は課外活動時間、“PLATZ”は勉強会に参加していた時間である。活動時間をすべて書きこむことで、どれだけ熱心に活動したかを評価するための指標とした。	

【図1-2】工学部ロボティクス学科Dさんの「1週間の行動履歴」

(2)「各学期の達成度自己評価」

このポートフォリオでは、各学期末に①「学生の行動目標（学期により5～6項目）」の達成度（0～100%）とその理由（各100文字）、②全履修科目の修学状況（成績、課題提出、出席など）の反省やその改善方法（300文字）、③日常生活状況全般（課外活動、アルバイト、病気・怪我など）について満足していること、感想、反省やその改善方法（300文字）などを登録する。

本学の開講科目は学習支援計画書（シラバス）に、その科目の「学生の行動目標」を最大6

項目記すことになっている。「修学基礎Ⅰ」の「学生の行動目標」は下記の6項目があり、学生は授業の最終日（自己点検授業）までに、自分でどの程度達成できたのかを項目ごとに「%」で自己評価を行う。旧バージョンでは「学生の行動目標の達成度について、達成できなかった原因と改善方法」を設問としていた。

1. 下記「修学基礎Ⅰ」①～⑥の「学生の行動目標」の達成度（0%、20%、40%、60%、80%、100%）を選択し、その理由を各項目100文字程度で入力しなさい。
 - ①「1週間の行動履歴」の作成を通して自己管理能力を高め、次学期での対応を文章で報告することができる。
 - ②講話の内容を整理し、それに対する自己の見解を文章で作成することができる。③グループ討議を通して問題点を見出し、自己の見解を口頭および文章で表現することができる。
 - ④学習・生活スタイルを認識した上で学習計画を立案し、履修計画書を作成することができる。
 - ⑤規則正しい生活をし、授業には欠かさず出席し、提出物の締切を守るなど積極的に学ぶ姿勢を確立できる。
 - ⑥本科目における学生の達成すべき行動目標を自己評価できる。

この方式はすべての科目の授業アンケートで採用されているが、「修学基礎」ではその理由も併記させている。それは、例えばA君の達成度60%とB君の60%とでは理由や事情が異なるからで、それこそが学生の自己評価になり、また学生との面談資料にもなるわけで、数字だけではあまり意味がないと考えている。

その他に、

2. 1期の全履修科目の修学状況（成績・課題提出・出席など）について満足していること、感想、反省やその改善方法について、300文字程度で入力しなさい。
3. 1期の日常生活状況全般（課外活動・アルバイト・病気・怪我など）について満足していること、感想、反省やその改善方法について、300文字程度で入力しなさい。

の2項目の設問があり、「2」の設問は学期に履修したすべての科目の修学状況、「3」は生活状況をまとめる。3学期制であるため、この「達成度自己評価」を年間3回作成することになる。

その実例として上記と異なる旧バージョンであるが、工学部ロボティクス学科Dさんの「2期の達成度自己評価」を紹介しておこう。

2期の達成度自己評価

①反省点をまとめ、次学期での目標を定めるためにできるだけ客観的な評価を行った。

工学部 ロボティクス学科 Dさん

1)【「修学基礎Ⅱ」の「学生の行動目標」の達成度について】 (達成できなかった原因と改善方法)

今学期においては、学習目標が全て達成できたとは言えない。学期後半では、頻繁に授業を休んでしまい、授業の内容が不理解のまま試験に臨んでしまった科目もあった。原因は、睡眠不足と食事回数の減少による体力の低下である。学期始めは、勉強会に参加して学習の理解を高めていたが、後半になると無理することが困難になった。来学期に今学期と同じような失敗をしないために、夜中心の生活から朝早めに起床する規則的な生活スタイルを身に付けなければならない。(215文字)

②私は講義への出席率はあまり良くない。そのため、各学期でこのような解決策を講じ、次学期実践することを心がけている。これを繰り返したことにより、現在は少し出席状況が向上しつつある。

2)【2期の全科目の修学状況についての反省と改善方法】 (成績・課題提出・出席など)

今学期を通しての科目への取り組みは、英語を除いては特に大きな問題もなく進めることができた。勉強会の効果があったため、授業の理解や試験の結果も先学期以上であった。課題についても、ほぼ提出期限は守れたと思う。しかし、やはり出席状況は芳しくなく、今後改善しなければならない課題が残ってしまった。来学期は、今学期の成績を維持しつつ、全教科皆勤する気持ちで授業に臨むよう心がける。取得単位数を増やすために、努力していきたい。(207文字)

②好成績を修められたことに対し分析を行い、唯一の問題が講義への出席状況であると確認した。

(214文字)

3)【2期の生活状況全般についての反省と改善方法】 (課外活動・アルバイト・病気・怪我など)

今学期は体調を崩すということはなかったが、睡眠不足や栄養不足など生活面で問題があった。課外活動のために外で食べる事が多くなり、偏った食事ばかり取っていたため、集中力が低下していた。なるべく休日にバランスのとれた食事を作っておくようにすることで、問題解決を目指す。課外活動については、プログラミング関連で勉強しなければならない内容が多くなり少し忙しくなってきたが、その分興味深い内容が増え、満足している。(202文字)

(209文字)

戻る

印刷する

【図1-3】工学部ロボティクス学科Dさんの「2期の達成度自己評価」

1. 4 「修学ポートフォリオ」の運用成果

学生が自分の夢や目標に近づくための自己管理、自己認識、自己再発見のツールとして考案した「修学ポートフォリオ」の運用開始から5年間、「KIT ポートフォリオシステム」の完成から3年間を経過しようとしているが、これまでの教育効果については次のように考えている。

第1に本学の学生は恒常的に学習活動に忙しいため、「いま何を省き、何に取り組むか（優先順位）」を考え、その活動記録を残すことにより、結果として修学・生活の自己管理能力を身に付け、時間管理が上達することになる。自己の行動を振り返り改善する能力の育成は、自己実現に向かう学生に対する支援のひとつと判断している。

第2に学生と教員との距離が一層近くなることによってコミュニケーションが深まり、また修学指導を要する学生の早期発見にも有効である。

第3に自己表現力が苦手な学生にとって、短文であっても繰り返し自己点検としての文章作成を続け、それに教員のコメントや添削が施されることで、その能力の向上が期待できる。

しかし何よりも、学生が自分の夢や目標に近づくための自己認識・自己再発見となることを期待している。

次に学生の評価として、まず平成19年11月に開催した「修学ポートフォリオ」に関する座

談会「夢の実現を支援する KIT ポートフォリオシステム」での学生の評価を挙げておこう。

【修学ポートフォリオを利用して良かった点】

- ①私がポートフォリオを利用してよかった点は、自らの行動を振り返る機会を得たことである。私は日記を付けていないため、生活を定期的に反省することはなかった。しかし、修学ポートフォリオを利用することにより、1日1日をどのように過ごしたか考える時間を得ることができた。それにより、その週の良い点と悪い点を明確にでき、今後の生活に生かした。
- ②高校までは自分の細かいスケジュール管理を行なわなくても課題をこなすことが出来たが、大学に入り、課題も増えたためスケジュール管理を行なわなければ課題をこなすことが困難になった。そのため、今までつけたことのなかったスケジュール管理の練習になった。また提出した行動履歴に対して修学アドバイザーの先生がコメントを書けるため、心配ごとや悩み事があると気軽に相談にいける関係を作ることが出来たと思う。
- ③1週間の行動履歴を1週間に1回書くことで1週間を振り返り、反省することで、次週の行動を改めることができた。自分が勉強をどれくらい行ったかを見つめなおすことができるので勉強にどれだけの時間を使うかがわかる。課外活動に当てる時間も勉強に使う時間を逆算して予定を立てられる。
- ④授業欠席をした場合、欠席欄に記録を入力することで危機感が生まれ、自分に警鐘を鳴らす意味があった。
- ⑤1週間の行動履歴は1週間まとめて入力していた。そのため「この週をどのようにすごしたか」を確認する手段であった。そこから反省が生まれ、行動を改善するという流れが自然にできた。その思考は習慣になったことはよかった。
- ⑥私は先に1週間のスケジュールを入力し、次の週のスケジュールの確認に利用していたので、1週間のスケジュール管理に役立った。提出後のポートフォリオには、必ず修学アドバイザーの先生の一言が書かれて返却されたので、先生が自分の生活を見守ってくれているという安心感が持てた。
- ⑦1週間の行動履歴では、教科ごとに何時間勉強したか振り返ることが出来た。したがって、「今週はもっと勉強するべきだったので、来週はもっと勉強しよう」、「今週は十分勉強できたから来週もこの調子で勉強しよう」など次週の勉強量を定める上で役に立った。また、勉強面だけでなく生活の面でも1週間を反省することができ、毎週目標を持って生活できたのでよかった。
- ⑧スケジュール帳で立てた予定と、実際に自分が行動したことを比較し、反省することができる。反省し、改善していくことで、勉強だけでなく、生活リズムも整えることができる。コメントの欄で、修学アドバイザーとコミュニケーションを図ることができる。

このように1日、1週間の振り返りにもとづく反省、時間管理、スケジュール管理、出欠席の危機管理、学習への意欲、修学アドバイザーとの良好なコミュニケーションなどの評価を得

ている。

次に、平成 16 年度以降各年度の学期ごとの授業アンケートを紹介しておきたい。本科目では授業アンケートを短時間で整理集計して早期に FD 活動に資するために Web 上(他科目は OMR シート)で実施し、その結果を学生に公開している。【表 1-1】は「高校時代と比べて自学自習は身に付きましたか」、【表 1-2】は「行動履歴や達成度自己評価は自分を見つめ直し自己評価を行うものですが、あなたにとってこの作成は有益と考えますか」の集計結果である。

いずれも高い評価を得ており、多くの学生がその有益性を認めており、「修学ポートフォリオ」作成の意義を理解しているものとみられる。具体的には、自己管理・行動の整理、将来設計、学習への姿勢、大学生活の意義、人間形成、自主性などを挙げているが、自分自身を振り返ることができ、大学生活や将来について保護者と話す機会が増えたという学生もいる。

しかし一方では、【表 1-1】の数値が異常に高いことは、学生にとって大学入学以前にこのようなことを行った継続的経験がなかったこと、実際に 1 週間、1 学期間、1 年間を振り返るということを初めて経験したからではないかと分析できよう。平成 16 年度 2 期の 64.9%が平成 19 年度 1 期には 94%となっていることから、今後このような学生が大挙入学して来る可能性が高いと考えている。しかし、そのような学生が「修学ポートフォリオ」を通して、何かに気が付き成長してくれることを願っている。

【表 1-1】 高校時代と比べて自学自習は身に付きましたか

	十分身に付いた	やや身に付いた	あまり身に付かなかった	全く身に付かなかった	回答数
平成 16 年度 1 期	12.7%	67.2%	17.5%	2.6%	1,404
2 期	9.4%	59.9%	25.6%	5.0%	1,156
3 期	19.4%	60.6%	15.1%	5.0%	1,007
平成 17 年度 1 期	26.8%	58.4%	11.9%	3.0%	1,341
2 期	15.5%	65.9%	16.3%	2.3%	1,321
3 期	24.4%	61.6%	11.7%	2.3%	1,141
平成 18 年度 1 期	23.6%	60.6%	13.5%	2.3%	1,528
2 期	15.4%	61.5%	20.3%	2.8%	1,301
3 期	23.0%	63.6%	10.7%	2.6%	1,284
平成 19 年度 1 期	24.2%	61.3%	12.2%	2.3%	1,133
2 期	14.9%	67.2%	15.4%	2.5%	1,114
3 期	29.4%	60.2%	9.3%	1.1%	944
平成 20 年度 1 期	26.6%	61.2%	10.2%	2.0%	1,209
2 期	15.1%	58.9%	22.8%	3.1%	1,152

【表 2 - 1】「1 週間の行動履歴」や「各学期の達成度自己評価」は自分を見つめ直し自己評価を行うものですが、あなたにとってこの作成は有益と考えますか。

	大変有益	有益	肯定率	回答数
平成 16 年度 2 期	6.2%	58.7%	64.9%	1,156
3 期	9.3%	68.5%	77.8%	1,007
平成 17 年度 1 期	19.0%	71.7%	90.7%	1,341
2 期	16.0%	70.3%	86.3%	1,321
3 期	18.0%	69.4%	87.4%	1,141
平成 18 年度 1 期	17.7%	72.4%	90.1%	1,528
2 期	13.7%	64.5%	78.2%	1,301
3 期	20.7%	68.1%	88.8%	1,284
平成 19 年度 1 期	24.1%	70.1%	94.2%	1,133
2 期	16.7%	71.5%	88.2%	1,114
3 期	23.7%	68.5%	92.2%	944
平成 20 年度 1 期	23.6%	70.1%	93.7%	1,209
2 期	18.9%	70.7%	89.6%	1,152

なお当然ながら、「1 週間の行動履歴」作成に不満を持っている学生は存在し、その大きな理由は「面倒くさい」である。その数は【表 1 - 2】で見ると限り少ないようにも取れるが、多くの学生は「面倒」と思いながら作成しているものとみられる。しかしそうであっても「1 週間の行動履歴」の成果を認めていることは、上述のとおりである。

次に担当である修学アドバイザーに対する評価は、「親身で熱意ある指導」「理解できる厳しさ」など良好であったが、反面「堅苦しい」「指導の格差」「個人面談が短時間」「課題の未返却」など厳しい意見もある。残念なことに修学アドバイザーの一部に本科目の位置付けと役割の理解が徹底しておらず、また授業手法にも改善の余地があることが判明している。

そのため以下のような授業改善活動を行っている。修学アドバイザーは各学期終了後に、授業アンケート結果にもとづいて FD 報告書（学生の行動目標の達成度に関する自己評価および改善、授業での工夫、授業アンケートの学生自由記述部分へのフィードバックコメント、成績評価の分布、その他）を作成し、修学基礎 WG（WG：ワーキンググループ）に提出する。WG は問題点を検討し改善策を加えて、次年度の「学習支援計画書」と「修学基礎 I II III の手引き（指導マニュアル）」の原案を科目担当責任者に提示する。その検討内容例を挙げておくと、①学生の成績、②行動目標と授業内容や課題・評価の整合性、③授業アンケートによる学生の授業評価内容、④日本語表現に関する時間数の拡大、⑤教員個人による自己点検・自己評価内容など多岐にわたる。次に科目担当者会議で協議したうえで次学期および次年度に向けての改善事項を決定し、学習支援計画書（シラバス）を改訂する。科目担当責任者はさらに基礎教育部長お

よび教育点検評価部委員会にこれらを報告して、PDCA サイクルを完成させ次年度に臨んでいる。

1. 5 展望と課題

まず学生から出ている改善提案を紹介しておこう。

- ①入力する画面へ行くのに何段階か踏まなければいけないので学生ポータル TOP ページに自分専用のリンクが貼れるようにすればポータル TOP ページはよく講義の確認で入るので思い立ったら書くことができるし、忘れない。
- ②ネットを使ってポートフォリオをつくるため、時間がかかるとタイムアウトになってしまうため、打ち直さなければいけないのが大変だった。
- ③入力したくなるような工夫をする必要がある。具体的には、項目を増やすなどである。現段階では、自由に文章を書けるところは一つだけである。そこに今週の良かった点や反省を書くので、情報量がどうしても限定されてしまう。多くの項目を設けることにより、今週の反省がしやすくなるのではないだろうか。
- ④パソコンからインターネットに接続しなければならないことがハードルを上げている。携帯電話からも入力できるようになれば、面倒なパソコン立ち上げ動作を嫌がる学生も利用しやすくなるのではないか。
- ⑤1週間の行動履歴を入力するにはノートパソコンを起動させる必要がある。この手間が学生のポートフォリオ離れの一つの大きな原因となっている。入力をより手軽にする方法として、学生ポータルの携帯サイトを開設することを提案する。現在でも補講・休講情報が携帯サイトに掲載されている。これを発展させて、1週間の行動履歴を携帯電話から入力できるようにする。
- ⑥過去を振り返るばかりでなく、それをふまえた1週間の予定をあらかじめ書くと思う。またポータルのトップ画面に入力する欄があれば、手間が省けて書く気になりやすい。
- ⑦私の家ではインターネットができないので、ポートフォリオを家で入力することができず、不便だった。その不便さを改善するためにも、携帯電話で気軽に入力できるようにするなどの工夫をしてほしい。
- ⑧1週間のテスト日程や勉強などの予定を記入できる欄があったらいいと思った。予定欄を設けることで、スケジュールを立てて、実行するという能力の向上が図れる。また、予定と実行した内容が比較しやすいので1週間の反省がしやすくなり、次週の目標も立てやすくなる。

このように、入力画面到達の簡易化、入力画面制限時間の延長、入力項目の増加、携帯電話からの入力など検討すべき課題が出されている。すでに解決した問題もあるが、セキュリティの観点から受け容れられないこともある。

次に教員側の問題を挙げておきたい。担当教員は主として人文社会科学および生涯スポーツ系の教員で、修学アドバイザーを兼務する。修学アドバイザーは1年間を通した学生指導（修学と生活）に力点を置き、学生の「自立と自律」を促しつつ、修学意欲を向上させることが求められる。そのため出席と提出物については特に厳しく、問題のある学生には迅速な指導を行っている。この方針は今後とも継続して行う必要性が高まるものと考えている。

次に課題となるのは、教員のフィードバックコメントや個人面談時のやり取りである。そこで「1週間の行動履歴」に登録された学生のコメントと教員のフィードバックコメントの実例を挙げておく。

【学生】 コミュニケーションドローイングのスケッチに時間がとてもかかったけど、計画的に課題ができたので、よかったと思う。英語のホームワークや修学基礎の提出物を家に忘れるなど忘れ物が多かったので、その点をもっとしっかりすればよかったと思う。

【教員】 夜遅くなる時は、気をつけて下さい。忘れ物をすると、かえって面倒になりますので気を付けてください。

【学生】 英語が苦手なので、英語を中心に勉強した。英語の小テストをいい点とれるように頑張った。英語以外はほとんど勉強できなかった。技術入門Ⅰの予習をすることができ、だんだん授業の予習ができるようになってきたが復習がほとんどといっていいほどできなかった。

【教員】 苦手を克服するためには、小さな「成功」を積み重ねていくことが大切です。少しずつでもよいので工夫することを忘れないようにしてください。

【学生】 穴水研修はけっこう楽しかったが、レポートや課題がたくさんあったので、2日目の夜はみんなが寝た後もパソコンでレポートを書いた。そのおかげでかなりレポートが作成できたが、家でしかできない課題もあるので、すごく憂鬱な気分になった。

【教員】 穴水の研修、お疲れ様でした。楽しく充実した活動に参加できたようで何よりでした。課題については、行事が予定されている場合など、なかなか調整が難しいとは思いますが、くれぐれも体調には十分注意しながら、計画を立て早めに取りかかるようにしてください。

【学生】 GWが明け、すぐに元の生活に戻すのはしんどかったけど、なんとか元の生活に戻し、遅刻する事なく大学にもいけたのががんばれたと思います。反省すべき点は平日寝る時間が少ないので授業中ちょっと寝てしまう時があるのでちゃんと寝る時間を取って、来週からの授業で寝ないように注意しようと思いました。

【教員】 ※同じ言葉を重ねて使わぬよう注意！GWにリズムを崩さなければ大丈夫ですよ・・・？

【学生】 家では集中してできないので、ライブラリーセンター等の学校の施設を有効活用し、

無事提出日までにレポート等の課題を出すことが出来た。これからもこういう施設を利用したい。睡眠時間がバラバラになってしまい不規則な生活態度になってしまったので、来週はきちんとした生活を送れたらいいと思った。

【教員】睡眠時間についてと、家で集中できない理由を調べて、対策をたてるように。

【学生】今週は中間テストのような大きなテストが2つもあり、何かと忙しい一週間だった。バイトがなかった分、勉強へ時間をまわすことができたのではないかと思う。情報設計の授業が難しくなってきた、ついていけないので少し嫌いになってしまった。来週OHへ行って、問題を解決したいと思う。

【教員】そうですね。オフィスアワーなどを利用して、担当教員に積極的にアプローチしてください。頑張ってくださいね。

このように学生を気遣いつつも、モチベーションを維持もしくは高めながら指導をおこなっている。些細なことであっても、あるいは大学生として稚拙な行動であっても、褒めるべきことは褒めることが肝要である。とかく近年の学生はアドバイスであっても「押し付け」と理解する傾向が強いため注意する必要がある。「課題を忘れた、勉強できなかった」に対して非難するようなコメントは慎み、何故そのようになったか原因を考えるようなコメントが有効である。要するに相談にのること、例えば「この件については相談しましょう。授業後、残ってください。」など、親身になることを惜しまない姿勢と実行が求められる。そのためには、情報共有のための事例報告会や専門家によるスキル指導研修会の開催が是非とも必要である。

もっとも大きな問題は教員の負担である。学科カリキュラム編成上、1クラスの学生数は40～60名と多く、その負担は大きい。また開講当初、「修学ポートフォリオ」そのものに対する理解不足と、学生との往復作業負担が過重であるとの批判が多かった。事実教員の負担は決して軽いものではなく、大学教員にとって本来の教育・研究の時間を大幅に割かねばならない。

他大学で実施されている初年次教育、例えば「基礎ゼミ」は少数教育としての有効性が説かれ、教員の負担はさほどかからないといわれている。しかし学生数10名のクラスが100クラス存在した場合、いわゆる全学出動体制であるが、これで統一的な教育と評価ができるのであれば問題はない。しかし現実はどうなのであろうか。

この問題を巨視的に考えた場合、本報告書「はじめに」に記したことを敢えて繰り返すことになるが、自分自身の経験や過ごした時代の価値観を金科玉条とし、学生の目線を見ない教育・研究指導を行ってきた自身を省みる大学教育関係者はどれほどいるのだろうか、という問に帰結する。研究専任は別として、いまだに「大学教員＝研究者」と信奉する大学教員は多い。それは本質的には誤りではないにしても、自身の所属する大学の位置付けを理解できず、あるいは理解しようともせず、自身の教育手法や内容を省みず、ただ学生の学力低下を嘆き、また理論倒れで実践できない教員も現実には少なくないのである。これはクラス学生数の多寡に限らず起こる事実であり、いまだ大学教員の意識改革が進んでいないことを物語っている。

しかし一方では、社会生活における心構えや能力、社会常識の体得などが、大学生にとって

必要であることを、教員は観念として十分に認識理解しているはずである。それを大学教育の中でどのような手法をもって学生に修得させるのか、担当教員はどのような姿勢で臨むべきなのか、担当教員間のコンセンサスをどのようにとるのか、どこまで学生の面倒をみるのか、その他様々な課題に具体的にどのように対処していくのか、いまや大学の個性ある教育の質が問われているのである。上述した「修学ポートフォリオ」の有効性に関する授業アンケート結果のあまりにも高い肯定的な数値は、多くの学生が大学入学以前にそれらの習慣を身に付けていなかったことの証左であり、大学としては危機感を禁じ得ないはずである。

本科目担当教員の多くは、授業や個人面談で学生と接し、かつそのデータを通して、入学を許可した大学の教育責任を最初に果たすべき位置にいることを理解し実践している。しかし本学の取組が逆に学生の主体性や自律性を妨げるとの主張もある。これをまったく否定するわけではないが、大学での入り口において、「かたち」を意識した教育指導を行うことは肝要と考えるし、少なくとも本学の1年生に対する「修学ポートフォリオ」を活用した教育手法は、いまのところ欠くことのできないものと判断している。全学で統一した「学習支援計画書（シラバス）」による共通の教育内容と評価項目および評価基準による組織的な取組は、その成果がようやく現れつつあるとあってよい。現在若手教員を中心としたWGによって、積極的かつ組織的な運営が立案・実践されてはいるものの、今後入学してくる学生に柔軟に対応できる教育力、指導力が一層求められることになろう。そしてその負担は軽くはならないことを覚悟して実践できる教員教育が必要となる。

結局のところ、大学教員にとっては専門外ともいえる「初年次教育」に適応でき、かつ積極的に実践できる教員の確保とその教育、そして大学の基本方針としてそれを確実に推進する実施体制の構築が必要であるということに尽きる。1年生に対する修学生活指導が上級学年のそれに結びつけることが大きな課題だが、その試みとして運用しているのが第5章で述べる各学年の「達成度評価ポートフォリオ」とそれを活用した個人面談なのである。